

君は春風のように

朝酌川の桜がすっかり散ってしまつた4月の中旬、コンテナいっぱいのだけノコを抱えた長身の男性が、ふらりと公民館に入ってきた。白髪と銀色に輝く顎髭を蓄えた男性の後には控えめな奥様が。もし奥様の姿がなければ、彼を山奥から出てきた仙人かと、見間違つたかもしれない。そんな雰囲気漂わす彼は「今年も掘ってきた」とぶっさらばつに呟いてコンテナを置いた。

ご夫妻はシーズンになると、毎朝数時間かけてだけノコを掘り、公民館に運び込む。公民館ではそのだけノコをホールに並べ、来館する人たちに自由にお持ち帰りいただく。新鮮なだけノコは大人気で、早い時には10分程でなくなってしまう。

朝どれのだけノコは、シーズン初めにはいいお値段がする



が、代金は決めず、お気持ち募金箱に入れていただく。そうして集まつたお金は「みんなの食堂」の資金となるのだ。

ご夫妻は昨年からの活動を続けていらつしやるが、「おかげでたくさん寄付が集まつた」とお礼を言つと「それはよかった」と、こともなげに呟く。そして、くるりと踵を返すと、春風のように悠然と帰って行くのだ。その3メートル後方を奥様が……。

公民館活動(地域活動)は、このご夫婦のほかにも多くの方々の善意に支えられている。登下校時の見守り、フラワープロジェクトをはじめ環境整備や清掃、諸事業への物心両面の支援等、これらに携わる方々は誇れることもなく、淡々と活動を続けていらつしやる。格好いいではないか。ただただ脱帽である。

追記 春風のようなご夫妻の

名は、とりあえず橋本地区のS氏としておく